



第31回
全国読書作文コンクール
優秀作品集

小学生5点・中学生4点

公益社団法人全国学習塾協会

小学生の部・大賞

「本が教えてくれるもの」

藤原 瑠生 (小六)

「本は大切にしておね。」これは、僕が母から言われたことばだ。その母は僕にたくさんの本を買ってくれた。本を読み終わった今、僕は母がそのような理由が分かってきた。本を読むと知識を得られるのはもちろんだが、心を育てることもできるのだと実感してきている。本は「もう一人の親」のような存在だと思う。本がたくさんある図書館は、つらい思いも忘れさせ、悩みを解決し、心に安らぎを与えることのできる場所なのだ。そう考えると、図書館はまるで天国のような所だと思った。

この本に出てくる「秘密図書館」は、シリアという国にある。僕たちは近くの図書館に家族と一緒に楽しく行くことができる。けれども国内戦状態にあるシリアでは、その図書館は場所が秘密であり、爆撃の間をぬってこっそりと命がけで行くしかないのだ。今、日本で平和に暮らす僕に、命がけで図書館へ行けますかと問われても、無理だと答えるのに決まっている。しかし、シリアのダラヤの町の人々は、命がけで図書館を守ろうとし、命がけで図書館に通ってくる。僕はここに本がものすごいパワーを秘めていることに気づかされた。人間の魂に、安らぎ、う

るおい、元気を与えているのだ。

「秘密図書館」もついに爆撃を受けた。内部は胸が痛む光景になってしまった。それでも、図書館の運営メンバーは修復にとりかかった。修復不能なくらいにひどい状態になった図書館を元通りにしようとする決意とその行動に僕は感動した。この人たちは、心から本を愛し大切にしているのだ。そして、この人たちの決してあきらめない心を僕も持ちたいと思う。

ついに、シリアのダラヤの町も政府軍に包囲され、人々は町から出なければいけなくなった。もちろん、図書館の運営メンバーやそこに通った人たちも同様だ。人々が町から去った後、政府軍によって、「秘密図書館」は発見され、本は踏み荒されてしまった。床に散らばった本には、たくさん足跡がついていた。図書館を命がけで愛し、守りぬいてきた人々にとって、図書館との別れがどれほど悲しく、本を踏みにじられたことがどれだけ悔しいことだろうか。その思いを想像すると、僕も胸をしめつけられそうになる。図書館に関わった人たちは、政府に移住させられた地で、車での移動図書館を始めた。彼らの本を愛する心は、どこへ行こうとも武力でおさえこまれても変わらなかった。僕は心からうれしさをこみ上げてきた。

僕は幼いころは、読書はあまり好きではなかった。しかし、本に触れる中で、そしてこの本に出会うことで、本はこの世界でも愛されていることを知った。本の一冊一冊は、私たちを育ててくれる宝物だ。これ

からも多くの本と出会い、自分の知識と心を育てていきたいと強く思う。

対象図書名 戦場の秘密図書館

大賞へ、審査員のひとこと

おとなが言っていることばや世間で格好が良いようなことばではなくて、自分の思いときちんとつり合う言葉を選ぼうとするところがとても良かったです。

「本の内容を説明すること」と「自分の思いを書いていること」を頭の中で整理し、きちんと自分のことばで書かれています。

本に書かれている文章は強烈だからどうしても内容に引つ張られがちですが、それに引つ張られずに自分の言葉できちんと書いています。とてもやわらかさがあつて、知性を感じられます。アンテナの張り方も上手です。大賞受賞、おめでとうございます。

受賞者のひとこと

僕がこの本を選んだ理由は、戦争に関係した本を読めば未知の世界を知ることができ、その中を生きる人間の心情を読み取れると思ったからです。戦争という自分の日常とはまったくかけ離れたことなので、読書作文を書いていく中で、うまくまとめにくいのが難しいと感じることもありましたが、戦争というものを頭の中で想像しながら、自分が思ったこと考えたことを心に残しておくことが、戦争のないより良い未来へつながるのだと僕は思っています。

この本を通して、人と本との関わりを今まで以上に教えられました。母がいつも言っている「本は大切にしてくね。」という言葉が理解出来始めた気がします。

受賞の知らせを聞いて、家族みんなで喜びました。幼い妹にも、本をたくさん読んだらどんなに良いことがあるか伝えていきたいと思えます。ありがとうございました。

小学生低学年の部・最優秀賞(小三)

において不思議

高橋 希夏 月

「えっ、お父さんの洗っていないくつ下で作ったボール。」

私はびっくりした。一日中がんばってはたらいた後のお父さんのくつ下は、けっこうにおう。犬は人間よりも鼻がきくと聞いた事があり、とてもくさく感じないのかと不思議に思い調べてみた。

犬は、人間の足のおいやあせのおいなど、人間がいやだと思うにおいが好きだと言う事を知った。だからハナは、自分の好きなにおいのボールをもらえて、においをかいで安心して、やる気が出て、訓練をがんばれたのかなと思った。においてすごい。

そういえば、において思い出した事がある。弟が生まれたばかりのころ泣いている時お父さんや、おばあちゃんがだっこしても泣き止まなかつたけど、お母さんがだっこするとすぐに泣き止んでねむってしまう事が何度かあった。

「赤ちゃんは、お母さんが分かるんだね。」と私が言うとお母さんは、

「赤ちゃんは、まだ目があまり見えていないけど、お母さんのおい分かるんだって。」と、教えてくれた。弟は、お母さんにだっこされて、お母さんのおいに包まれて、安心して泣き止んだと分かった。やっぱりににおいてすごいなと思った。

それでは、私の好きなにおいて何だろう。それは、赤ちゃんの時から使っている毛布のおいだ。やさしいにおいがする。その毛布でねると、ぐっすりねむれて、次の日元気いっぱいですごせる。において、

人や犬を元気にしたり、安心させたりするパワーがあるんだなと思っ
た。

ハナが好きなにおいは、お父さんのくつ下のおい、赤ちゃんの好き
なにおいは、お母さんのおい。好きなにおいはみんなちがう。私が苦
手なおいも、だれかには好きなにおいで、それで元気になったり安心
したりする。においって、すごい不思議だな。

大好きなおいのくつ下ボールのおかげで訓練をがんばれるようにな
ったハナ。私のお父さんのくつ下のおいも、いつか何かの役に立つ時
が来るかもしれない。

対象図書名 セラピードッグのハナとわたし

受賞者のひとこと

初めて書いた自分の読書感想文が優秀賞に選ばれたと聞いて、賞がもら
えたんだと思っとうれしかったです。でも、最優秀賞の意味が私にはよく
分からなくて、お母さんに聞くと「三年生の中で一番良い賞なんだよ」と
教えてもらったけれど、それを聞いてもあまりピンと来ませんでした。お
ばあちゃんに「オリンピックで言えば金メダルだよ」と言われて、そこで
すごい賞をもらえたんだと分かってとてもびっくりしました。

塾でもみんなに拍手をもらったし、家族にもすごいとたくさんほめても
らえて、とてもうれしかったです。今までこういう事がなかったので、自
信ができました。

初めての読書感想文だったので、書き方が分からなくて、たくさん考え
たし、何度も何度も書き直して、正直とても大変でした。それでも、最後ま
であきらめずに、一生懸命がんばって書いて良かったです。

小学生の部・最優秀賞(小四)

想いをあきらめない大切さ

柚木 快人

ぼくは、宇宙について調べる事と工作が好きだ。だから、プラネタリ
ウムについて読んでいく内に、色々な事を知りたいと思った。

まず、不思議に思ったのは、なぜプラネタリウムを手作りしようとし
たのかという事だ。星空が部屋のかべに映し出される装置を買って、楽
しめばいいのと思った。ぼくだったら、それで満足して終わりそう
だ。でもぼくと同い年の時の大平さんは、違ったので驚いた。学校に火
薬を持って行ったり、素材を作っている会社に電話をしたりして、他の
子供がしないような行動を沢山するからだ。同じクラスにこんな友達が
いたらわくわくするし、仲良くなりたいと思った。

大平さんは寝る時間を削ってまで、自分の作りたいプラネタリウムを
どうやったら形にできるのかを考えながら作業している。その姿を想像
したら、自分には真似できないと思った。そして、目的のために苦手な
事も勉強している所が格好良くてすごい。最後にすごいと思ったのは、
情熱と時間をかけて作った物が目の前で壊れてしまったのに、落ち込ま
なかった所だ。「きつと直せるさ」という前向きな言葉が心に残った。

ぼくが共感した部分は、物作りに夢中になる気持ちと製作が思い通り
にいかなくても、あきらめない心を持つ事だ。例えば、東京オリンピック
クがコロナウイルスで一年のびたけれど、選手達があきらめずに練習を
続けて、メダルを獲得している場面を見ても同じ気持ちになった。

ぼくも、あきらめずに頑張った経験がある。学校の理科の授業で、電
池を使った車を作るのに何回も工夫を重ねて、ようやく走った時は、と

でもうれしかった。たぶん大平さんもこのような気持ちに何回もなったのだと思う。

いつも自分の限界まで、出来るだけきれいな星空を映し出そうとする姿を見て、ぼくも何かに挑戦する時、限界まで出来る事をしようと思った。自分が作りたい物を形にするのが難しくても、試しに作って失敗したとしても、何があっても最後まであきらめない大平さんを尊敬した。なぜなら、小さな挑戦を何回もくり返しながら、未来にみんなが必要とする物を作っていると知ったからだ。

ぼくもいつか誰かを感動させたり、困っている人に役立つ物を作る事ができたら、きつと面白いだろうと思った。そのためには、何かを必要としている周りの人達にもっと目を向ける事が大事だ。そして、自分のしたい事を追求する心が大切だと気付いた。将来、今のぼくには想像もできないような、もっとすごい物を作っていけると信じたい。

対象図書名 星空をつくる プラネタリウム・クリエーター 大平 貴之

受賞者のひとこと

受賞したという結果を知った時、「やったー」と心が飛び上がりました。とてもとても嬉しかったです。僕にとって、「読書作文」は一大事だったからです。

まず、文章を読むのが苦手です。だから、最初に大平さんがプラネタリウムについて話している動画をユーチューブで見ました。内容が大体分かったあとに、本をゆっくりと少しずつ読みながら自分の気持ちを確かめて、とにかく書き出しました。色々な気持ちを言葉で表すことも苦手で、文章にしていくことがとても難しかったです。ひとつひとつの作業に時間がかかりました。

自分の思いをどう表したらいいのかを家族に聞いて、アドバイスをもらいながら一生懸命考えました。「こんな言葉があるんだな」「こうやって表現すればいいのか」という発見がありました。そして、大平さんから色々なことを教えてもらい、まだまだ僕が知らないことが沢山あるということ

に気付きました。

作文にも書いたように、これからも「自分の想い」を大切に、挑戦してみたいことを諦めずに頑張っていきたいです。大きな賞をいただいて、本当にありがとうございます。

小学生の部・最優秀賞(小五)

勇氣と信頼

浅野 眞宏

ぼくの家では犬を飼っています。とってもかわいく、一緒に走り回ったり、散歩に行ったりします。

この本を読むまでは、セラピードッグという言葉を知ることがありませんでした。セラピードッグとは、病気の人のそばにいてあげて笑顔にしてくれたら、動物介在療法で体のリハビリにも良い結果を出します。そんな素晴らしい犬なのに、場合によっては産まれて大事に育てられる犬、事情があり処分される犬。ぼくは犬を飼っているからこそ、犬が処分されることに胸がしめつけられそうになりました。

動物管理センターから引き取られたハナちゃん。人間に不信感を持っていたであろう。しかし、みんなの協力によって良い関係を築き表情を変えていくハナちゃん。その関係性が出来てこそ、立派なセラピードッグになれるのです。しかし、セラピードッグになるには認定試験があります。人に吠えてはダメだったり、一緒に歩くスピードを合わせないといけないというたぐさんのハードルをクリアしなければなりません。人間もすっかり犬を見守っています。犬もすっかり人間を見ていると思います。犬と良い関係を築くのも、辛抱強さや、甘やかすだけではなく時にはきびしく接する事の大切さも立派なセラピードッグになるに

は必要である事も知りました。

この本の中には大との関係だけではなく、友達との関係も書いていました。相手が思っている事が分からなかったり、自分が思っている事が相手に伝わらなかったりと、人間同士も難しいと思います。ぼくも、友達と遊ぶ時に、お互いにやりたい遊びが違うことがあります。その時は、ジャンケンやゆずり合いをして何をして遊ぶか決めていきます。自分の意見ばかり言っていると相手を嫌な気持ちにしてしまうので、相手を思いやる気持ちも大切にしています。中には、自分から意見を言えない友達もいます。そんな時は、自分から友達に意見がないか聞いたりします。聞いてあげることと意見が言える友達もいるので一人一人の個性として、大切に付き合いたいです。

この本の最後に「がんばれ、わたし。」と書いてありました。目がキラキラ光っている様に見えました。ぼくも、何かに挑戦する時、試合にいどむ時、くよくよせずシャキッと自分を応援できる位の自信を持って前に進みたいと思います。目がキラキラしている人は素敵だなど思いません。ぼくも友達や周りの人に、そんな風に見てもらえる様になりたいと思います。日々の生活で、全てが上手く行くわけではありません。くじけそうな時、泣きそうな時、そんな辛い時こそ自分で自分に「がんばれ、自分。」と言える様に強くなりたいです。

受賞者のひとこと

僕は塾に通って二年目になります。今回の「読書作文コンクール」で最優秀賞をもらうことが出来て、僕はとてもびっくりしています。

最初に本を読んだ時、感想文は書けそうになかったです。お母さんに、その事を相談すると、一度ではなく、二度、三度と読みなさいと言われま

対象図書名 セラピードッグのハナとわたし

した。僕は二度目から少しずつ考えながら読んでみると、セラピードッグの気持ち、ハナちゃんの気持ちも分かってきました。そして、作者が伝えたいことが分かり、読書の楽しさを知ることが出来ました。また、この感想文を読んで頂いた方々に感謝します。ありがとうございました。

小学生の部・最優秀賞（小六）

「自分だけの水族館」

赤木 陽翔

ぼくはこの本を読んで、自分の好きなことや興味があることを一生をかけてする事も楽しそうだなと思いました。またそれだけ打ちこめる事があれば人生も楽しいだろうと思いました。

ぼくは魚が大好きです。お父さんとぼくと二人でいく魚つりも大好きだけど、近所の川や池であみでとった魚などを水そうで飼育するのがとても大好きです。今はカメ八匹、スッポン一匹、メダカ五十四匹以上、金魚六匹、ナマズ三匹を飼育しています。たくさん飼っているので水かえやそうじをするのは水が重くて大変です。毎日朝と夕方にエサをあげないといけないけど、エサを食べてくれてる姿を見るとかわいしい、いやしにもなったりします。

今年初めてナマズ飼育に挑戦しました。ぼくはナマズが大好きです。と飼いたいと思っていました。お父さんとお母さんに言っていたらある日、とつぜんサプライズで買って来てくれてとてもうれしかったです。

しかし六匹のナマズは一週間もしないうちに原因が分からないままみんなあつというまに死んでしまいました。その時にぼくは「何で死んでしまったんだろう。」と悲しくて泣いてしまいました。飼育していた魚や

カメなどが死ぬのはとても悲しいです。

もう二度とナマズを死なせないために、インターネットや学校の図書室でナマズの本や、図鑑を借りたりして、ナマズを死なせないように勉強しました。しかしナマズの情報がのっていないくても大変でした。しかし調べていくと少しずつ原因が分かりました。死因は水質が悪いことで病気になることが分かりました。さらにナマズの飼いやすい環境の方法など知りました。そしてもう一度ナマズ飼育に挑戦しました。本当に成功するか不安でした。でも調べて勉強したおかげで今は上手く飼育できています。これからも手を抜くようなことをせず、大事に飼育していきたいです。

これからもいろいろな勉強をし、飼育している魚たちに幸せになってもらいたいです。ぼくも一生をかけていろいろな種類の魚の飼育に挑戦し、自分だけの水族館を作りたいです。

ぼくは大平さんがプラネタリウムに取り組む姿はすごいと思いました。ぼくは勉強がきらいだけど魚の事なら大平さんに負けないくらいがんばれると思いました。

対象図書名 星空をつくる プラネタリウム・クリエイター 大平 貴之

受賞者のひとこと

ぼくは、大好きな魚の事を書いて最優秀賞を受賞できて、とてもうれしかったです。作家さんに自分の作文が読んでもらえたと聞いて、とてもおどろきました。

メダカは百五十匹くらいまで増えました。ナマズの餌にするために、毎日近くの川でフナを釣りました。暑くて、汗をいっぱいかいたけど、大好きな釣りもできて、ナマズの餌にもなって、そんな事を毎日できてとても幸せです。

学年で最優秀賞に選ばれたと知ったのも、ボートの上で釣りをしている時でした。メールをお父さんに見せられて、とってもうれしかったです。

そしてごほうびに釣り道具を買ってもらいました。おばあちゃんやいろんな人からもほめてもらって、うれしい事がいっぱいありました。これからもいい体験をしていきたいです。

中学生の部・大賞

幸来につなぐ希望のバトン

原口 萌音 (中一)

まさか、こんなに酷い状況が世界のどこかで起こっているとは。

ちょうど、わたしの弟が生まれた十年程前、わたしが暮らしている日本とあまり変わりがない平和でのどかな街だったダラヤはアサド大統領の独裁政権に対するデモをきっかけに包囲され、街が封鎖され、銃弾が飛び交い、食糧やライフラインが断たれ、常に命の危険にさらされることとなった。

街を封鎖し、食糧を断つとは平和な日本で育った私には考えが及ばなかった。授業で習った戦争は、五十年以上もはるか昔のことで、他国との戦争だった。銃弾や爆弾だけでもその悲惨さは計り知れないものであったが、それを上回る残酷なものだった。同じ国の者からの一方的な攻撃、銃弾だけでなく、食糧やライフラインまでも絶ち命を断とうとする。・・残酷という言葉だけでは片付けることができない。

私は心が痛くなった。

この酷い状況が続く中でダラヤの幼い子どもたちは、未来や天国に対する幸せな想像をすることすらできなかった。喜びや光に満ちた場所を思いうかべることさえできなくなっていた。想像は自由なものなのに、子どもたちの心の中にある想像の自由までも侵していることに私は行き場のない怒りを感じた。

「本は雨のようなものじゃないかなって。雨はすべての者に分けへだてなく降りそそぎます。そして、雨の降りそそぐ土地に草木が育つように、本を読むことで人間の知恵は花開くんです」「体が食べ物を必要と

するように、魂には本が必要。」この本の中には、ダラヤの若者たちが発した心を打つ言葉がたくさんあった。

わたしは、そんな風に考えたことは今まで一度もなかったが、しかし、この言葉は私の心に突き刺さった。私には想像もつかないほどの恐怖と絶望感、制限ばかりの日々の中で本は唯一の自由だったのだと思う。

若者たちにとって、秘密図書館や本は未来への希望の象徴だったのだろう。

空爆の止まない状況の中、若者たちは命の危険を顧みず、がれきの中から書物を救い出し秘密図書館を作った。最初は、アムジャドの本が大好きで全ての本を読んでみたいという思いから始まったものだったが、本を救出して仲間が増えれば増える程、秘密図書館はダラヤの人にとっていろいろな機能を持つ特別な場所になっていったのだと思う。

知識を広め高める場所、希望を見つける場所、つらい現実から逃れひと時自分の世界に没頭できる場所であったのだ。また、幸せだった過去の自分を取り戻せる場所、心を育て心を癒す場所、コミュニケーションをとれる場所、家族のような場所でもあったのだと思う。また、評議会のある場所でもあった。

アサド大統領の独裁政権よりも住民たちがおこした評議会の方が本当の政治のあり方ではないのか。がれきの片付けや爆撃後の修理、ゴミ収集などの公共サービス、安全な水と食べ物の分配、小学校・病院の運営、制限のある暮らしの中で楽しみも提案した。私は、アサド政権を一言で表すと破壊、それに対し評議会は創造と再生ではないかと思う。

そして私が一番強く思ったのが、自由と平等な権利を皆が持てる国家にしないといけない。命の危険や孤立のない治安が保たれた安全な社会

でないといけないということだ。同じ地球に暮らす同じ人間なのだから。

この本を読むまでは、シリアという国名も現状も知らなかった。私と同じようにこの内戦の現状を知らない人も多いだろう。命の尊さは同じなのに、ダラヤでは数えきれない程多くの命が失われた。

シリアに、私たちと同じ人がいるということ。世界の人に考えて欲しい。少しでも多くの人がダラヤの惨劇を知ること、世界は変わるはずだ。

惨劇と若者たちがおこした秘密図書館が形を変え復興の象徴として未来へと語り継がれ繋がっていくことを私は心から願う。そして、このシリアだけではなく、紛争下にある国々に暮らす人が希望を持ち、人や国の不平等を世界中からなくしたい。

ダラヤの人にとって、秘密図書館が精神的な支えであり未来への希望でもあったように、紛争下に暮らす人々にとって、辛い現実の中で未来に向かって生きる意味を見出せるような未来へつながるボタンを持ち、少しでもいい方向へ向かっていくことを願っている。

大賞へ、審査員のひとこと

日本の中学生の日常とはかけ離れた、「戦場」、「秘密の図書館」という、かなり隔たりのある話題の本を、濃く深く読み込んでいて、その世界が見えるように書いています。

自分が理解しているからすぐ書けるわけではありません。理解して、何を書けばよいか、何を書かなくてもよいのか、きちんと整理されています。読む力がともありますね。きちんと物を見て、体験して、それを言葉にしていくことが、将来出来そうな予感がします。先入観にとらわれずに、まず自分の目で見て書いている感じがして、とても気持ちよ

対象図書名 戦場の秘密図書館

く感じました。大賞受賞、おめでとうございます。

受賞者のひとこと

今回、このような素敵な賞をいただき大変うれしく思います。私は正直、国語が得意な方ではなかったのですが、この本に出会い、衝撃を受けました。『本は雨のようにすべての人に降り注ぐ、体が食べ物を必要とするように魂には本が必要だ』この本に出てくる若者の言葉です。意味合いは違っても知れませんが、この本の言葉は私の心に雨のように降り注ぎ響き渡りあつという間に読んでしまいました。感想文もシリアに暮らす若者たちの心情と日本に暮らす自分自身を照らし合わせ私の心から出てきた魂の言葉をそのまま文章にしたものです。あまりいいことを書こうとは思っていませんでした。

いい本に出合うことが出来れば誰でも受賞するチャンスがあると思います。皆さんも、いい本に出会い、受賞の喜びを味わってみてください。

中学生の部・最優秀賞(中一)

歌から学んだ自分の生き方

北村 妃奈子

私は歌うことが苦手です。私が歌うといつも音程が少しズレていて、美しい歌声とは言えません。みんなで合唱する時も自分が歌っているのが恥ずかしくて、声を出しているのかどうだか分からないくらい小さい声で歌います。

私はこの本を読んで、コタロウや開、翔平のように美しくきれいな声で歌えるようになりたいと思いました。私とコタロウ達の歌声には何の違いがあるのでしょうか。私の歌声には何が足りないのでしょうか。

もちろん素質という点は大きくあると思います。しかし、一番大きいのは「心」だと思います。自分のためではなく、誰かのために、誰かを思って歌う「心」が大切なのだと思います。私は誰かを思い、歌うということはしたことがありません。誰かのために心を込めて歌うことで、すてきな歌声になるかもしれません。

また、「心」の他に「楽しむ」ということも大切なのではないのでしょうか。私の友達に、とても歌の上手な男の子がいます。高く響く声は、はっと息をのむほど美しいのです。その男の子が歌を歌う時には、いつも楽しそうに歌っています。あまりにも楽しそうなので、

「何か良いことあたるの。」
と聞いたことがあります。

「何もないから楽しそうに歌ってるんや。」
と笑顔で教えてくれました。歌は楽しく生きるために必要不可欠なものかもしれないと思いました。

ペレイラの「心がまえがだめなら、授業もだめ、うたもだめ。」と言った言葉が心に残りました。人の悪い所ばかり探したり、人の嫌がることばかりしたりする人は相手のことを考えることができていません。そんな心構えの人が、人の心を動かせる歌が歌えるとは思えません。逆に素直で優しい人が歌う歌は聞く人も自然と笑顔になり、楽しい気持ちになります。歌はその人を映す鏡だと思います。私が、小さな声で聞こえるか聞こえないか分からないような声でしか歌えなかったのは、自分の声に自信がないからでもあります。誰かを笑顔にするんだという「心」がなかったからだと思います。人を思いやる優しい心を持って歌えば、自然と笑顔になり、頬が緩み、大きく美しい声が出せるかもしれないと思いました。

男性には声変わりがあります。歌を歌っている思春期の男性にとっては、大きな壁とも言われています。きれいなボーイソプラノが変声によって出なくなってしまうことは、本人にとってはとても大きな出来事だと思います。今まで自分が持っていた長所が失われることは、とても辛いことだと思います。しかし、音楽をしている思春期の男性は、誰しも通る道です。乗り越えていけるかは、本人の気持ちと努力しただけだと思います。

私にも同じような経験があります。私は、小さい頃、特にスポーツをしていた訳ではありませんが、走るのが得意で、長距離走も短距離走もいつも一番でした。走るのが速いことが自分の長所で自慢にも思っていました。しかし、年々、走るのが遅くなり、常に一番を取ることは難しくなりました。それどころか、リレー選手にも選ばれなくなりました。スポーツをしている訳でもないから仕方ないと自分で理由付けをし、平静をよそおっていましたが、内心ショックで、走ることがどんどん嫌に

なりました。どんなにがんばっても以前のように一番にはなれないと思
った時に私は思いました。走ることをがんばるといふことも大切だけ
ど、ひとつだけの長所にとらわれず、気持ちを切り替え、他の長所も伸
ばそうと。

オリンピックでメダルをとった選手が

「みんないい演技をした方が楽しい。」

とコメントを出していました。

相手が失敗したら自分がメダルを取れるかもしれないではなく、みん
ながいい演技をし、自分の技も磨き、その中で自分もつといい演技が
できたら良いというのです。私は、心がきれいな人だなと思いました。
すんだ心で演技をしているからメダルが取れたんだなと思いました。

スポーツでも歌でも同じだと思います。自分のことだけ考えていて
は、人の心に響きません。人の心を感動させるのも人の「心」であるこ
とに気づかされました。

私が苦手としていた歌も、誰かを思い、心を込めれば、少々音程がズ
レていても、誰かを笑顔にすることができると思えば、自然と大きな声
で歌うことができるかもしれません。

何事も苦手意識を持たずに、短所と思ひ込まず、いい所に目を向け、
たくさん長所を見つけていくことで自分に自信ができ、ちよつとした
ことでこわれない、強い「心」ができるのではないかと思います。

受賞者のひとこと

私はこの本を読んで、すべての人に長所と短所があり、それは永遠のもの
ではなく、変化するものであることを学びました。
私は何事に対しても自信がなく、心配性な所があります。ことわざで言

対象図書名

その言は、長い旅をした

えば、石橋をたたいて渡るタイプです。見方を変えてみると、何事も行動
する前によく考えることのできる慎重さを持っているとも言えます。

このように、短所は長所ともとらえることができるのです。

私は今回の受賞を通して、またひとつ長所が見つかったように思います。
これからも、自分の長所、人の長所に目を向けながら成長していきたいで
す。

いつもご指導してくださっている先生方に感謝いたします。ありがとうございます。

中学生の部・最優秀賞(中二)

「夢へと続く道」

三上 倅奈

心が震えるような出会いをしたことはあるだろうか。「夢」は、さま
ざまな体験や経験から、自分で見つけ出すものだ。将来、自分がなりた
いものが決まっていけないという人は、「夢がない」のではなく、まだ出
会っていないだけなのかもしれない。まだ夢が決まっていけない人に対し
て、「夢がない、夢を見つけない」という人もいる。人に捉えられた
り、急がされたりして決めることではないと思う。いつか、未だ見ぬ、
心震える出会いがあった時こそ、ただ夢に向かって邁進することができ
るのだと思う。

この物語の主人公、ユージも幼い時に母につれられて見に行った、オ
ーケストラの中のフルートの音に心を打たれた。ユージがひかれたフル
ーティストは全員、ルイジ・サンティーニ先生の教え子だった。その運
命的な出会いから、自分もプロのフルーティストになることを夢みる。

しかし、ただの憧れから叶えられるほど、簡単な夢ではなかった。念願
のサンティーニ先生のクラスに入るも、クラスメイトとのレベルの差は

歴然だった。しかし、どんなにバカにされても、うまく演奏できなくてもユージは夢を叶えるためにめげなかった。貧しく、決して恵まれた環境ではなかったが、全て彼の努力で補った。最後には誰よりも心に響く演奏をし、自らの手で夢を勝ち取ったのだ。

私は普通の人の三分の一という低体重で生まれた。長く入院していたこともあり、私の周りには日常的に病と戦っている友人や医師、看護師の方々など、医療関係の人が大勢いた。私自信も、きっと誰もが驚く程体が弱く、退院してからも毎週のように診察やリハビリに、お世話になっていた。その都度、医師や看護師の方々が、優しく声をかけてくれた。私は三歳から、そして今も水泳をしている。体が弱く、喘息気味だった私の心肺機能を高める目的で始めたものだ。熱が出たり、気管支炎になったりと、思うように練習もできず、何度も心が折れそうになったが小学三年生の時に、競泳の選手になった。その頃にはずいぶん体も強くなり、病院に行く回数が減った。それは、支えてくれた両親や周りの人、医療関係の方々のおかげ、そして、心が折れそうになりながらも続けることができた、自分自身の努力によるものだ。

生まれた時から常に身近な存在でずっとよりそって頂いた医師にはいつしか憧れを抱くようになっていた。そんな私が本格的に医師になりたいたと思っただのは、小学四年生の時のある出来事がきっかけだった。水泳の練習中にひざを痛め、やがてその痛みは歩けない程の激痛に変わった。松葉づえで生活し、約二ヶ月泳ぐことすら出来なかった。あたり前の日常を奪われ、不安だった私によりそい、治療し、支えて下さったのも医師だった。その時の医師の言葉一つで、うその様に不安がやわらぎ安心することが出来た。けがも完治し、いつもの日常をとりもどすことができたのだ。

この頃から、私は医師になりたいと強く思うようになったのだ。「病やけがでつらい思いをしている人を救いたい。誰かの人生の手助けをしたい。」と思うようになった。もし、その時私はその医師に出会えていなかったら、けがのせいにして水泳を続けていなかったかもしれない。選手の練習量はきつく、一旦はなれると、戻ることは容易ではなかった。けがをいいわけにして、逃げ出していたかもしれない。その医師のおかげで続けることができたのだ。三歳から水泳をはじめて十一年。楽しいことばかりではなかったが、体を人なみに強くする目標を達成し、仲間を支えられ、選手になる夢を達成した。そして、運命的な医師との出会いにより今日まで続けることができています。

自分自身の心が震えるような体験をして、決めた夢なら、誰に何を言われてもつら抜き通せるのだろう。自分が本気でつら抜きたいと思えるものに出会えて初めて、夢へと続く道が開けるのだ。その道は決して楽しいことばかりではない。簡単に叶えられないからこそ、俄然やる気に満ちて簡単にあきらめられないのだ。

挫折しそうな時には、ライバルと互いに高め合い、励まし合
い、また、あの心震えた瞬間を思い出し、夢に向かって頑張ろうと思
う。

受賞者のひとこと

幼い頃、本を読んで貰うことは好きだったが、自分で読む事はほとんど
しなかった。

こんな、かつて活字嫌いだった私が、読みやすい本や興味のある本から
手にとり、少しずつ読み進めていくうちに、読書の喜びを感じるようにな
った。今や本は、自分の気持ちを整理したり、新しい考え方や思考に触れ
る手段として、私にはなくてはならないものとなっている。

今回、この本を読んで改めて「諦めないことの大切さ」について、しっかり考え直すことができた。自分が、本当にやり通したいと思えることは、とても素晴らしいことだ。その夢に向かって、どんな困難にも立ち向かっていく姿は、どんなものよりも、カッコいい。自分の生活を振り返り、自分の心に素直に生きていきたいと思った。

こんなにも素晴らしい賞を頂けたことに感謝し、これからも、たくさん本に触れ、夢に向かって、日々邁進していきたい。

中学生の部・最優秀賞(中三)

全ての人に「ありがとう」

大沼 まこ

自分の限界を知る。そしてそれを超える。そのくり返して、人は何かをつかみ、より高みへと上がっていくのだろう。一つの習い事を長く続けている人ならわかるだろう。どこかで必ず壁につき当たることがあるということ。果たしてその時、諦めるのか、挑み続けるのか。その選択が迫られる。フルートがただの趣味なら、何もこんなキツイ環境に身を置く必要はない。ユージの心の揺れが、私にも手に取るように伝わってきた。本気で目指しても、実際プロとしてやっていけるのはほんのひと握りだという。まして、技術と表現力とスター性、全てを備えたソリストとなると、数千人に一人だというから、気の遠くなる話だ。それでも努力を続ける限り、希望はあると私は信じて疑わなかった。

フルートの美しい音色に魅せられ、この世界に入ったユージと同じように、私もバレエの美しさに引き込まれて、バレエ教室に入った。まだ「赤ちゃん」と言われてもおかしくない二歳で始めたので、私のバレエ歴は長い。私の先生は厳しいことで有名だ。たとえ赤ん坊のような私にも容赦は無かった。稽古場に保護者を入れない方針だ。幼い子供達が親

と離れたくなくて泣き出す光景は、日常だった。そんな中、レッスンを心待ちにし、楽しんでいたのが私だった。ユージのように、早く憧れの人に近付きたいという一心だった。年齢が上がるにつれて情熱は薄れるどころか、より一層強くなっていった。

いくつもの習い事の中でも、私は他の全てに優先してバレエと向き合ってきた。ユージが指導者に恵まれたように、私も厳しい先生に鍛えられたおかげで、毎年の公演でセンターを任せられるようになった。ソロのコンクールにも出場し、評価されるようになった。ユージが周りの実力者をどんどん追い抜いて上達していく姿が、かつての私と重なり胸が熱くなった。ユージが羨ましい……。私だって順調にレッスンを続け、もっと成長して、ユージが誓ったように、観客に感動を届けたかった。

私の足に異変が起きたのは、中学生になってまもなくのことだった。つま先に痛みを感じるようになり、レッスンのたびに違和感があった。恐る恐る病院に行った。「指の関節が完全に潰れています。」と医師は冷静に言う。母が尋ねる。「治りますよね」——私は祈るような気持ちで次の言葉を待った。「治るものではないです。バレエは無理ですよ。」——目の前が真っ暗になるとはこういうことか……。何かの間違いであってほしいと願ったが叶わないことだった。

トウシューズの履けないバレリーナは、もはやバレリーナではない。足の故障は、バレエにとって致命的だということは言うまでもない。私は絶望のどん底につき落とされたのだった。十二年にも及ぶバレエ人生に終止符を打つしかなかった。

自分の限界を知る。そしてそれを超える。確かに今までは私なりに超えてきた。自分の努力でいくらでも夢に近付けると信じてきた。どこま

受賞者のひとこと

中三の私にとって、今回がコンクール参加最後となりました。締め括りともいえる最後に、このような名誉な賞を戴くことができ嬉しさと感謝の気持ちでいっぱいです。

小学二年生で入塾した私は、欠かさずこのコンクールに参加してきました。八年間という年月の重さを今、しみじみとかみしめています。その分、思い出も数え切れないほどです。何度か大きな賞を戴き、表彰式のスティージに立てたことは夢のような経験でした。あの時の緊張と高揚感の入りが止まり、表彰会場にようやく辿り着いたこともあり、一生忘れられない思い出となりました。家族の支えがあったことを、改めて感謝の気持ちで込み上げてきます。

そして、何より、長きにわたって情熱溢れる作文指導を続けて下さった先生にはどんなに感謝してもきれない程です。「賞の大小にこだわらず、とにかくベストを尽くすべし！」という先生の考え方がみんなに浸透して、私自身もその姿勢を貫いてきました。切磋琢磨し合える恵まれた環境下でこの八年間、大いに読書し、悩み考えながら大いに作文を書き、自分自身と向き合う貴重な時間を持つたことで、私も大きく成長できたように思います。

来年、高校生になるので、もうこのコンクールとお別れだと思うと少し寂しいけれど、今まで培った「書く力」を高校でも活かしていきたいと考えております。今まで本当にありがとうございました。

で行けるか分からないが、私もバレエを単なる趣味で終わらせるつもりはなかった。バレエのない人生など考えられなかった。音楽と同じように、表現力と技術が融合して初めて「感動」が届けられるバレエを、私はまだまだ極めるつもりでいた。熱意、情熱、覚悟、どれを取っても私はユージには負けていない。こう思うのは私の思い上がりだろうか。

痛みをこらえて踊ったところで、もはや以前のような高度な技術は発揮できない。無意識に足をかばってしまう私の動きを、先生が見逃すはずがなかった。厳しい先生の目をごまかせるはずがなかった。センターで踊り続けてきた私のポジションは、いとも簡単に他の人に移ってしまった。私の居場所は完全になくなってしまったのだ。

まだ、十五年しか生きていない私に、こんな試練が訪れるとは考えもしなかった。私は今回絶望のどん底からはい上がれないまま、この本を手にした。そして、同い年のユージに出会った。フルーツが好きでたまらないというユージの思いや、周りの人に支えられて成長していく彼の姿が私と重なり、何度も泣きそうになった。これから大きな夢をつかもうとしているユージが羨ましくてならなかった。

バレエをやめて以来、嘆いてばかりの私だったが、ユージに教えられたことがある。それは感謝の心だ。長い間、私はどれだけ多くの人に支えてもらっただろう。その支えがあったからこそ、実現できたステージだった。関わってくれた全ての人に「ありがとう」と言わなければ。そう気付かせてくれたユージにも「ありがとう」だ。

本気で何かに向き合ったことのある人は強い。たとえその道で成功しなくても、いつか必ず役に立つ。私もそう信じることにした。

第31回(令和3年度)全国読書作文コンクール
優 秀 作 品 集

令和3年10月 発行

発 行 公益社団法人 全国学習塾協会
〒170-0005 東京都豊島区南大塚3-39-2
TEL 03-6915-2293 FAX 03-6915-2294
E-mail info@jja.or.jp

